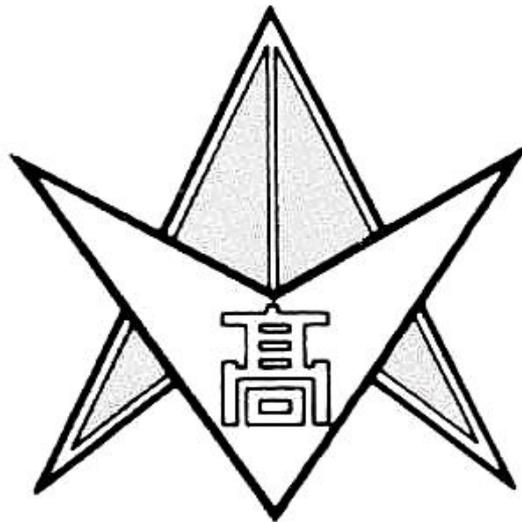


新ゆき

第57号

令和2年度



秋田県立大曲高等学校

あゆみ

第57号

目次

【巻頭言】

「大曲高校スタンダード」の目指す次の高み・・・校長 近江谷正幸・・・ 2

【研修記録】

国語科校内研究授業記録 国語総合学習指導案・・・斎藤 竜二・・・ 3
地歴公民科校内研究授業記録 世界史B学習指導案・・・泉 広宣・・・ 4
理科校内研究授業記録 生物学習指導案・・・佐藤 賢輝・・・ 8
英語担当教員授業力向上実践研修報告書・・・村井 稔子・・・12
芸術科校内研究授業記録 書道I学習指導案・・・竹村 美範・・・14
高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて・・・斎藤 竜二・・・16

【学科】

商業科の取り組み・・・商業科 佐々木優子・・・17

【トピックス】

大曲高校の現状の分析・・・川俣 玲・・・18
授業互見月間について・・・研修部 坂本 真道・・・22

表紙題字
竹村 美範（天祐）

「大曲高校スタンダード」の目指す次の高み

校長 近江谷 正 幸

本校では、新しい学習指導要領のキーワードとなっている「主体的・対話的で深い学び」に着目し、5年前からアクティブラーニングや、そのための指導方法等の充実を研修テーマとして取り組んできた。そして、「生涯にわたって学び続ける意欲と力を育む～課題解決志向型授業『大曲高校スタンダード』を通じて」を研究主題とし、「探究活動等実践モデル校」として授業改善の取組を進めた。一昨年度はその成果を授業公開するとともに、事業実施報告書をまとめて公表し、さらに昨年度は、「秋田県学力向上フォーラム in 大仙市」で、高等学校の協力校として全国から集まった各校種の先生方に授業を公開した。当日は、その日のための特別な授業をするのではなく、すっかり定着した日常の授業風景をそのまま公開するという姿勢で臨んだ。その意味で、本校にとって「大曲高校スタンダード」は、その名の通りスタンダードになっており、あたりまえのこととして取り立てて主張したり強調したりする必要がないものになっていた。そこで昨年の研究集録において私は、「新しい学習指導要領が完全実施されるときには、さらに次の高みを目指して模索しているだろう」と結んだ。

しかし、今年度は御存知のような社会状況のもとで臨時休校が続き、授業研究どころか教育活動そのものが実践できない状態が続いた。学校再開後も「三密」の回避が絶対命題となり、学校での「新しい生活様式」が叫ばれた。マスク着用が国民の義務のような空気が広まり、飛沫拡散防止のため対面での会話はできるだけ控えることが求められた。

そうすると、知識の理解の質を高め、資質や能力を育む「主体的・対話的で深い学び」の前提が崩れてしまう。ペアワークやグループ活動ができなくなり、相手の考えを聞いたり、自分の想いを伝えたりすることが制約されることになる。そして、教員との対話や生徒同士の協働を手掛かりに自己の考えを広げ、意見交換したり、議論したりすることで新たな考え方に気付くとともに、自分の考えをよりよいものとする「対話的な学び」が根本から否定されることになる。本校の授業改善は、予想だにしまった全く異なる高みを目指さざるを得なくなった。

もっとも、「大曲高校スタンダード」が日常化することで教師も生徒もこのスタイルに慣れてしまい、必要性の感じない場面でもペアワークやグループ活動を行っていたのではないかと、形だけの「大曲高校スタンダード」になっていなかったらどうかということについて、見直すきっかけになったことも事実だろう。ややもすると、目に見える動きのある授業をすることで、アクティブラーニングを進めているという自己満足に陥っていた可能性があることも否定できない。いったん冷静に振り返るちょうどいいタイミングだったのかもしれない。

自分としては、本校が目指す次なる高みは、対話によらなくても頭の中が真っ赤にアクティブになる一人完結型ラーニング、すなわち「主体的で深い学び」に重きを置いた実践ではないかと考えている。これは、目に見えないために検証しづらいところがあるものの、これこそが本来、学びの核心だろうと思う。特に「深い学び」については、習得・活用・探究という学習過程の中で、各教科の特質に応じた「見方や考え方」を働かせながら知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、さらには、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが重要だ、といわれている。これは、ある意味、「頭の中のアクティブラーニング」といえる。頭の中が真っ赤であれば、ペアワークやグループ活動等によらなくても一人で完結できる目指すべき学びの形である。もちろん、学びの成果を検証する方法も考えなくてはいけない。

来年度は一人一台端末が配付され、各教室に電子黒板や書画カメラも配備される。Wi-Fi 環境も整備される見込みであるため、そうなれば、オンライン授業も実施可能となる。場合によっては、次年度の研究テーマが、「オンライン授業における『大曲高校スタンダード』の在り方」になるかもしれない。「頭の中のアクティブ・ラーニング」であれば、オンライン授業でも実践できるだろう。

第1学年1組 国語科（国語総合）学習指導案

日 時：令和2年6月19日（木）2校時
 授 業 者：斎藤 竜二
 対 象：普通科 14R 32名
 使用教科書：『新探求国語総合 古典編』（桐原書店）

1 単元名 十訓抄「大江山」

2 目標

- (1) 古文への関心を深めるとともに、他者と協力して主体的に問題解決に取り組むことができる。(関心・意欲・態度)
- (2) 和歌の解釈を文章全体の内容理解に役立てることができる。(読む能力)
- (3) 用言の活用について理解し、知識として定着している。(知識・理解)

3 単元と生徒

1年普通科の男子14名、女子18名からなるクラスであり、多くの生徒が国公立大学への進学を希望している。日頃から「学び合い」による授業を実践しており、主体的に授業に取り組む姿勢が少しずつ身に付いてきている。本単元に入る前に用言の活用について4時間のドリル学習を行っているが、まだ全員の理解が十分とは言えない状態である。本単元は、用言の活用の習得という学習目標に基づいて収録された単元であり、多様な用言の確認が可能である。互いに教え合い、学び合うことで知識の定着を図りたい。

4 単元の指導計画（全4時間）

- ① 作品について、読み・重要語句の確認、概要の把握・・・1時間
- ② 用言の活用・・・1時間（本時）
- ③ 内容の読解・・・1時間
- ④ 和歌の解釈とまとめ・・・1時間

5 本時の計画

- (1) ねらい 学び合いの活動を通し、用言の活用について理解を深める。
- (2) 展開 A関心・意欲・態度 B話す・聞く能力 C書く能力 D読む能力 E知識・理解

	学習活動	指導上の留意点	評 価
導 入	本時の流れや目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標に加え、態度目標を示す。 ・最後に理解度を測る確認テストがあること、その合格のために協力して学習することを伝える。 ・目標の全員達成を目指すことを強調する。 	
文中の用言について、全員が基本形・活用の種類・活用形を正しく答えることができる。			
展 開	活用の種類と活用形の見分け方について要点を解説する。 教室内を自由に立ち歩き、互いに質問したり説明したりしながら、用言の活用に関する問題をプリントで解く。 各自答え合わせを行い、答えをもとに考え直したり、人に教えたりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が考える時間を保証するために、あらかじめポイントをまとめたプリントを配付する。 ・活動の終了時間を明示する。 ・ネームプレートを使用し、各自の課題達成状況を可視化する。 ・問題に対する授業者の介入は最小限にとどめ、生徒の主体的な活動を促すような声かけをする。 ・解答は教卓に用意しておき、好きなときにもっていかせる。 	A積極的に学び合いに参加している。
ま と め	確認テストを受ける。 本時のふりかえりを記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントの問題を理解すれば解けるテストを作成する。 ・態度目標に沿って活動できたか、今日の学習を通してわかったことは何かを振り返らせる。 	E文中の用言の基本形・活用の種類・活用形を正しく答えることができる。

地歴公民科（世界史B）学習指導案

日 時 令和3年2月10日（水）2校時
対象生徒 2年普通科文型23R
7名（男子2名、女子5名）
教 室 学習室南1
指 導 者 地歴公民科 泉 広宣

1 使用教科書 詳説世界史B 改訂版（山川出版社）

2 単 元 名 第10章 第2節 アメリカ独立革命

3 単元の目標

- (1)北アメリカ植民地の形成を振り返り、イギリス本国と対立する原因を理解する。
- (2)アメリカ独立戦争の経緯を確認し、アメリカが勝利を得た要因を理解する。
- (3)合衆国憲法の内容を理解し、アメリカ独立が与えた国際的な影響を考える。

4 単元について

- (1)教材観：アメリカの独立は、フランス革命のさきがけとして、自由を求め新しい社会を形成しゆく市民革命の先駆としてとらえたい。
- (2)生徒観：過去の授業の基本的事項の定着ができていない生徒も多く、できるだけ、世界史の連続性を意識させて授業を展開していきたい。
- (3)指導観：ATプリントの予習を前提に、できるだけ視覚資料を使用しながら、ポイントをしばって、全員を授業に積極的に参加させたい。

5 単元指導計画と本時の指導

第4章 第1節 産業革命（2時間）

第2節 アメリカ独立革命（1／1）＝本時

第3節 フランス革命とナポレオン（3時間）

6 単元の観点別評価

	関心・意欲・態度(A)	思考・判断・表現(B)	技能(C)	知識・理解(D)
評価 規 準	ATプリントの予習および、その発表で積極的に授業に参加している。	独立にいたった経緯、独立戦争を勝利した要因、アメリカ独立の影響を考察できる。	地図で地名や領域を確認できる史料を読み取ることができる。	約20年アメリカ独立の経緯を説明することができる。

7 本時の計画

(1) 目標

- ①アメリカ独立の背景を理解する。(B)
- ②独立の経緯と13植民地が勝利した要因を考える。(B) (D)
適切な地図や史料を読み取る(C)
- ③独立後のアメリカ社会の特徴と影響を考える(B)

(2) 展開

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 10分	○予習の確認	・予習してきたATプリントをグループで確認し、割り当てられた質問にマジックで用紙に解答を書く。	・できるだけ、全員が解答書けるように問題の割当を配慮する。	・予習をしてきて、話し合いに参加しているか。(A)
展開 1 10分	①北アメリカ植民地の形成	・解答を用紙に、黒板に貼って答える。	・フランスとの対立はできるだけ簡潔にする。	・解答をしっかりと答えているか。(B)
	◎対立の背景を考える。 課税問題と貿易制限があった。		・重商主義＝本国優位を確認する。	
展開 2 15分	②アメリカの独立	・ボストン茶会事件からの流れをまとめる。	・年表形式でまとめる。	・コモンセンスと独立宣言を読めるか。(C)
	◎勝利の要因を作業しながら理解する。 その1 トマス＝ペインのコモンセンス その2 独立宣言の内容		その1) 国内世論の高揚 その2) 外国の支援 ・ロックにも触れる。	
展開 3 10分	③合衆国憲法の制定 ①人民主権の共和政 ②厳格な三権分立 ③連邦主義	・連邦派と反連邦派の対立があったことを理解する。	・モンテスキューにも触れる。 ・国旗と「USA」に触れる。	・パリ条約での領土の変更を理解できているか。(C) ・アメリカ独立革命の意義と影響を理解したか。(B)
まとめ 5分	○学習のまとめと振り返り	・プリントに答えを書き振り返る。	・時間が無い場合は、感想を優先させる。	

【研究協議会（参観された先生からのコメント）】

藤田先生

《良かった点》

○スライドの活用により、教師の説明がより具体的になっていたと思います。特に植民地と本国の政治的関係の図と重商主義における経済的関係の図はとても工夫されていたと思います。

○ATプリントを予習させて臨ませているのは、その内容を踏まえて授業内容を深める探究型授業の前提ができていたと思います。

《改善点について》

○生徒に考察させるような発問を通じて、生徒の対話的な学習の場面を設定できていれば、より効果的であったと思います。例えば「フレンチインディアン戦争後に植民地と本国の対立が深まった理由を考えよう」の問いをグループ討議と発表させる学習を経ることで、あのスライドを活用した説明がよりインパクトをもって響いたのではないかと思います。

《感想》

○授業展開の中で、年表によって流れを解説しつつ、スライドを活用して個別の出来事の内容や背景について説明するという流れがしっかりしていて、とてもわかりやすい授業でした。今回の授業は、泉先生の授業であったと同時に、泉・藤田の「チーム世界史」の日頃の授業実践の成果としての意味もあった内容でした。ありがとうございました。



戸嶋先生

《良かった点》

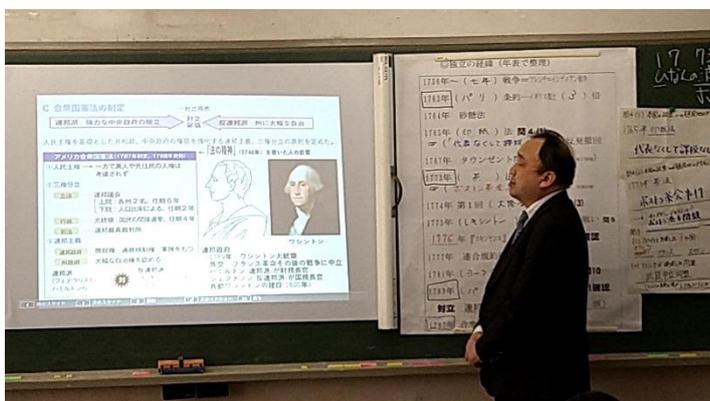
○レベルの高い授業ができるのも、生徒が予習してきているからだと感じた。

《改善点》

○予習の時点で解決している項目と授業の中で初めて深める項目を、もう少し分けて、深める項目に時間をかけることでメリハリのある授業になると思った。

《感想》

○お忙しい中、ありがとうございました。おつかれさまでした。



坂本先生

《良かった点》

○生徒それぞれに問題を割り当てて解答させることで責任を持って考えることに繋がると思いました。生徒の参加を促す手立ての一つとして参考にしようと思います。

○パワーポイントの活用や史料読解の場面が多く盛り込まれており、生徒の頭がアクティブになるような授業でした。

《感想》

○個人的には、独立宣言の史料読解はもう少し時間をかけたいと思いました。アメリカ国のみだけでなく、多くの影響を多方面に与



えたということを感じた授業でした。ありがとうございました。

第10章 近代ヨーロッパ・アメリカ世界の成立

2. アメリカ独立革命

アメリカ合衆国の独立に至る経緯と近代国家としての特質をとらえよう

[本時のポイント]

1. 北アメリカ植民地とイギリスの対立

○(1)13 植民地の形成と(2)自治の気質 ○(3)英による課税と統治の強化 ○(4)対立の激化

2. アメリカ合衆国の独立 [1775~83] ○(5)戦争の開始 ○(6)独立への世論の高まり

○(7)独立宣言を公表 [1776.7.4] ○(8)連合規約の採択 ○(9)諸外国の支援や義勇兵の参加

○(10)合衆国の勝利 [1781] →(11)英による独立の承認 [1783]

3. (12)合衆国憲法の制定 [1787] ○(13)近代国家の理念に立脚した内容 ○(14)独立後の動向

演習問題

問1. 下線部(1)に関して、北部と南部の間の生産や労働の形態の違いについて簡潔に説明せよ。

問2. 下線部(2)に関して、13 植民地ではそれぞれ独自の自治組織が発達した。それらの総称を答えよ。

問3. 下線部(3)に関して、18 世紀後半になって英がこのような政策をとるようになった事情を説明せよ。

問4. 下線部(4)に関して、本国による(1) 1765 年の印紙法、(2) 1773 年の茶法に対して、それぞれについて植民地側の反応や発生した出来事について説明せよ。(3) 1774 年に各植民地の代表者が本国に自治の要求をするために組織した会議名を答えよ。

問5. 下線部(5)に関して、(1) その発端となった武力衝突が起こった2つの場所を答えよ。(2) 大陸会議で植民地軍総司令官に任命された人物を答えよ。

問6. 下線部(6)に関して、これに影響を与えた、独立の正当性を主張した『コモン=センス』の著者を答えよ。

問7. 下線部(7)に関して、(1) これを起草した人物を答えよ。(2) これは近代民主政治の基本理念を明言したものであった。自然法思想と社会契約説の立場から主張された内容を説明せよ。

問8. 下線部(8)に関して、これにおける中央政府の権限の強弱を答えよ。

問9. 下線部(9)に関して、(1) 合衆国を支援して参戦した3カ国を答えよ。(2) ロシアが提唱した同盟の名称を答えよ。(3) 義勇兵として参加した①仏と②ポーランドの自由主義貴族をそれぞれ答えよ。

問10. 下線部(10)に関して、これを決定づけた戦いの名称を答えよ。

問11. 下線部(11)に関して、(1) この条約名を答えよ。(2) 英が合衆国に割譲した地域を答えよ。

問12. 下線部(12)に関して、このための会議が開催された都市を答えよ。

問13. 下線部(13)に関して、これを示す内容を簡潔に説明せよ。

問14. 下線部(14)に関して、(1) 初代大統領となった人物を答えよ。(2) 1800年に新たに首都に定められた都市を答えよ。(3) 民主国家とはいえない実情が存在していた。簡潔に説明せよ。

第3学年 31R 理科(生物) 学習指導案

日 時 令和2年6月25日(木) 7校時
 令和2年6月26日(金) 2校時
 対 象 31R普通科理型17名
 教科書 数研出版 生物
 授業者 大曲高校 佐藤 賢輝

1 単元名 第5章 動物の反応と行動 第5節 動物の行動

2 本時の計画

(1) ねらい

動物の行動について理解し、なぜそのような行動をするのか考えることができる。

(2) 展開

A：関心、意欲、態度 B：思考、判断、表現 C：実験の観察、技能 D：知識、理解

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・サルの絵をみて何を考えているか想像する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜそのような行動をするのか具体的に考えながら想像させる。 	
学習課題：動物はなぜその行動をするのか			
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれて意見を共有する。 ・各グループから3人ずつ、①～③の各エキスパートグループに行き、エキスパート学習を行う。 ①かぎ刺激 ②性フェロモン ③条件付け ・①～③のエキスパート学習で学んだことを各グループに戻って、教え合い、ジグソー活動に取り組む。 ・クロストークを行い、全体で意見を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3人グループになり、予想を共有させる。密にならないように距離をとらせる。 ・3つのエキスパートグループをつくり、①～③の各エキスパート学習に取り組ませる。 ①～③とそれぞれ考えて行動しているか確認させる。 ・①～③で学んだことを各グループに戻って教え合わせ、課題に取り組ませる。グループの結果を自分の言葉でプリントにまとめさせる。 ・グループごとに説明させ、全体で共有させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エキスパート学習で学んだことを踏まえ、学習課題について考えているか。(B) ・動物の行動について理解できたか。(D)
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習の振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・R80(リフレクションシート)に記入させ、本時の振り返りをさせる。 	

I期テーマ：生徒の思考を深める授業展開についての工夫と実践上の課題

課 題：学力層の差 → 改善策：考査成績の平均をとってグループをつくる
 時間配分 → 改善策：授業時間の近い2日で実施

エキスパート① ～イトヨ～

()・・・動物に特定の行動を引き起こす刺激
例 1



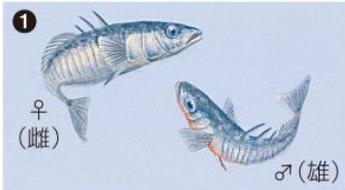
なぜそのような行動をするのか

例 2

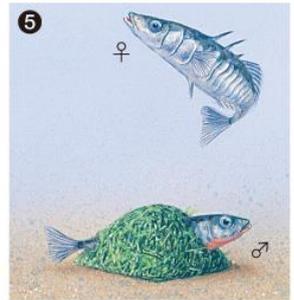
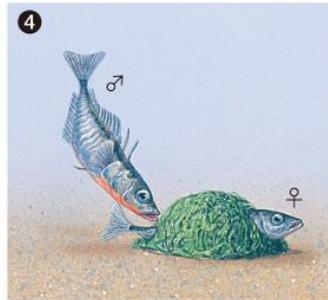
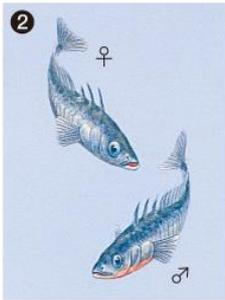
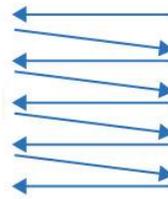
雄と雌の反応の連鎖

雄 (腹部が)

雌 (腹部が)



- 1
- 2
- 3
- 4
- 5



なぜそのような行動をするのか

エキスパート② ～カイコガ～

()・・・情報伝達のため体外に分泌される化学物質

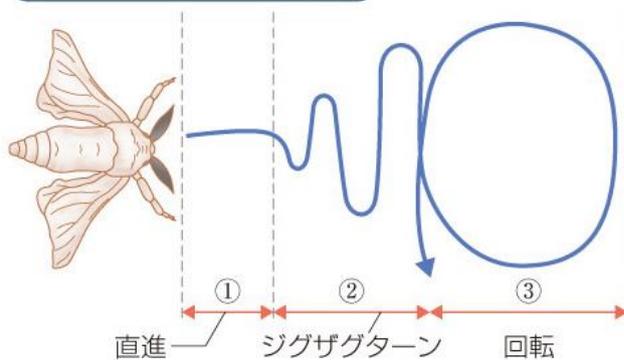
種類	機能	例
	同種の異性を誘引したり、生殖行動を誘導する	ガ・チョウ・ハエ・イモリ・イヌ・サル
	集団を形成したり、集団を維持する	ゴキブリ・カメムシ
	他個体に経路を伝える	アリ・シロアリ
	敵の存在を知らせる	ハチ・アリ・アブラムシ

カイコガの ()

- ・雌は腹部末端の外分泌腺から () を分泌
- ・雄は触覚で受容 ()
- () ながらフェロモンが多く存在する方向へ移動

カイコガの雄の定位行動

③カイコガの雄の定位行動



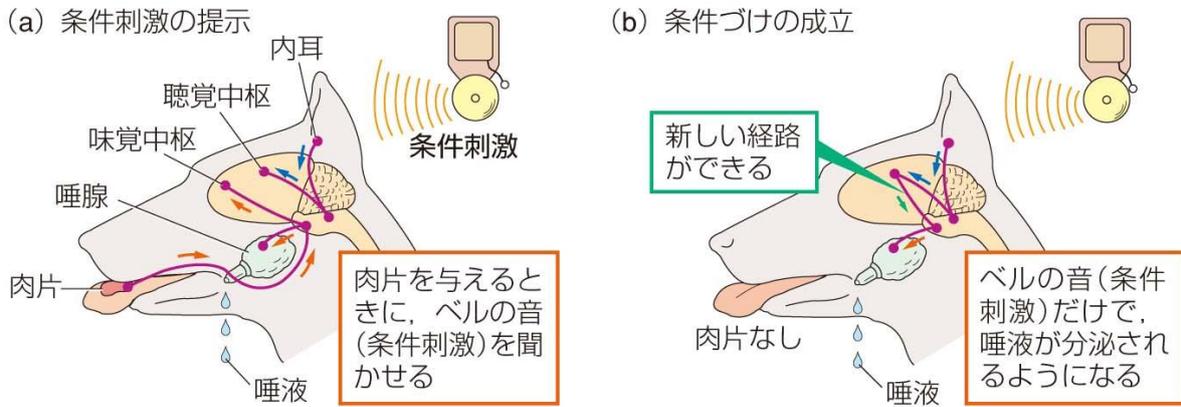
- ①フェロモンを受容している間は直進する。
 - ②フェロモンを受容できなくなると、左右に移動するジグザグターンを行う。
 - ③フェロモンを受容できないと、ジグザグターンの幅は徐々に拡大されていき、やがて回転行動を行う。
- 雄は、①～③の行動の組み合わせによって、フェロモンの分泌源に近づいていく。

なぜそのような行動をするのか

エキスパート③ ～条件付け～

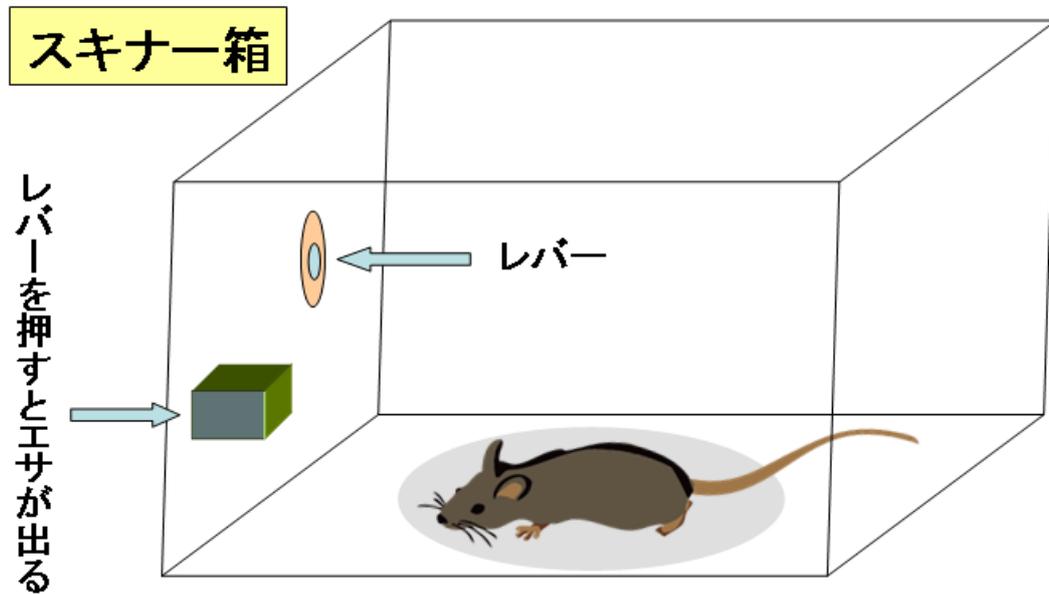
連合行動・・・2つの異なる出来事の関係性を学習

() 条件付け・・・本来の反応を引き起こす刺激とは無関係の刺激と反応が結びつくことで行われている学習



() 条件付け・・・試行錯誤によって自身の行動と報酬あるいは罰を結びつけて学習すること

スキナーの実験



なぜそのような 行動をするのか

英語担当教員授業力向上実践研修報告書

英語科 村井 稔子

この研修は、秋田県の高等学校における英語教育の改善及び充実を目指し、新学習指導要領の趣旨を確認するとともに、新しい英語教育に求められる重点的な内容について実践的な研修を実施することにより、英語担当教員の指導力の向上を図ることを趣旨として行われている。今年度は次のとおり実施された。

- 1 期 日 9月17日(木)
- 2 場 所 秋田県総合教育センター
- 3 テーマ 統合的な言語活動を通して発信力を高める指導の在り方
- 4 内 容
 - (1) 講座Ⅰ 10:10 ~ 10:50
講義
新学習指導要領を踏まえた授業の在り方【担当指導主事】
 - (2) 講座Ⅱ 11:00 ~ 12:00
統合的な言語活動を通して発信力を高める指導の実践【英語教育推進リーダー】

実践例1 Speaking

He Hates Carrots

“Eat your vegetables, Mickey,” Mom said. “I am eating my vegetables,” Mickey said. He was eating the sliced carrots. He was eating the sliced carrots one by one. He was eating them one at a time. He picked up one sliced carrot with his fork. He looked at it. He slowly put it in his mouth. He slowly chewed it. Finally, he swallowed it. Then he drank some water. Then he picked up another sliced carrot with his fork. Mom watched him. “Why do you hate vegetables, Mickey?” He said, “I don’t hate vegetables. I hate carrots.” “Why do you hate carrots?” Mom asked. “Because they don’t taste good,” Mickey said. “But they are good for you,” Mom said. “They are good for your eyes. They help you to see well. Don’t you want to see well?” “(),” Mickey said.

[Task 1] If you were Mickey, how would you replay to Mom? Think of a sentence to fill in the blank.

Role-play

Mom: They are good for your eyes. They help you to see well.

Don’t you want to see well?

Mickey: ()

[Task 2] If you were Mom, how would you persuade Mickey to eat carrots?

Mom: You must eat carrots. ()

[Task 3] In a group, take turns sharing your ideas. At the same time, try to answer Mom back.

Lesson 11 Key to Winning

Q1. Do you do anything when you want to concentrate?

Yes → What do you do?

No → Try to remember something that other people do when they want to concentrate. Who does what kind of thing?

Comments from _____

Q2. When you are under pressure, do you do anything to make yourself feel easy?

Yes → What do you do?

No → Try to remember something that other people do when they are under pressure.

Comments from _____

(3) 講座Ⅲ 13:00 ~ 14:00

講座Ⅱに基づくマイクロティーチングの計画

My “Cool Japan” (増進堂 NEW FLAG I より) を理解し、スピーキング、またはライティングの活動の計画を立てる。(ALT とのチームティーチングで行うことを想定)

(4) 講座Ⅳ 14:10 ~ 15:50

マイクロティーチングの実践

講座Ⅲで立てた計画で模擬授業を行う。

5 感想

高校において、新学習指導要領は令和4年度から学年進行で実施される。私たち英語担当教員は、統合的な言語活動、思考力・判断力・表現力の育成、発信力の強化といったことを意識して授業を行っていかなければならない。今回の研修では、英語教育推進リーダーによる模擬授業やマイクロティーチングの計画や実践を通して、次のような自らの課題を見つけることができた。① ALT とのチームティーチングをより効果的なものに改善していくこと。特に即興性を求める言語活動においてはALTの活用は有効であると考えた。② スピーキングやライティングのフォーマットの与え方を工夫すること。フォーマットがあれば生徒は発信しやすくなるが、発信力を高めていくためには、何をどの程度与えるのか、または与えないのかを考えて授業を計画することが必要なのではないかと思う。

研修で得たアイデアや指導法を活用しながら、これらの課題の解決に向けて研鑽を積んでいきたい。

第1学年 13R 書道 I 学習指導案

日 時 令和2年11月26日(木) 3校時
対 象 13R(普通科) 11名
教科書 光村図書 書 I
授業者 竹村 美範

1 単元名 「行書の学習」 蜀素帖の鑑賞と臨書

2 単元目標及び生徒の見方・考え方

(1) 単元目標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
書き初め展に出品することにより、書の伝統と文化に興味を持つ。また、今まで学習した行書の基本的な用筆を発展する。	行書の学習での臨書を通して「蜀素帖」の線質や点画の特徴を理解し、それを表現するための用筆・運筆の技法を習得する。	行書の伝統と文化に関心を持ち、行書の表現や鑑賞の創造的活動に主体的に取り組む。

(2) 生徒に求める「見方・考え方」と目指す生徒の姿

- ・書きぞめ展に出品する準備を進めると同時に日本の伝統である書きぞめについて理解を深める。
- ・主体的に行書の成立過程や字形や用筆の特徴について確認する。
- ・点画の丸み、連続・省略などの行書の特徴を楷書と比較し理解する。

3 単元と生徒

(1) 生徒について

向上心が旺盛で、学習に対して真摯に取り組むクラスである。硬筆や毛筆の学習に興味関心がある生徒が多い。

(2) 単元について

行書では最初に蘭亭序を学習して、さらに学習を深めるために蜀素帖の臨書と鑑賞をする。また、蜀素帖は行書の特徴がよくあらわれている古典である。

4 指導計画

蜀素帖と米芾 (1時間)
蜀素帖の鑑賞と臨書 (6時間) (本時 3/6)

5 本時の学習

(1) ねらい

筆路を確認し臨書する文字を観察し筆脈と抑揚、それに伴う点画の丸み、連続や省略、筆順の変化を確認する。

(2) ICT 活用の研究と実践

- ・Zoomを使ったオンラインで千葉県和洋女子大学教授湯澤聡先生からご指導をしていただく。
- ・各自で iPad mini 4 を使って YouTube の動画を視聴し筆路を確認する。
- ・フラッシュカードアプリで基礎知識を定着する。
- ・BGMに「1/f ゆらぎ」の音楽を使うことで、緊張感の中でもリラックスして実技に取り組む。
- ・Blogに掲載されている筆路や臨書する文字を観察する資料を活用する。

(3) 学習過程

A：知識及び技能 B：思考力、判断力、表現力等 C：学びに向かう力、人間性等

段階時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	本時の学習目標を確認する。 古典の基本を確認する。【フラッシュ】	チェックリストで今までの学習を振り返る。	意欲的に取り組もうとしているか。(C)
展開 35分	行書の書き方の確認をする。【Zoom】 動画で筆路を確認する。【YouTube】 全員で筆路を観察する。 各自で筆路を観察する。 【iPad mini 4】 動画を参考にして臨書してみる。	通信状態が不良の場合は予定を割愛する。 YouTubeでの例をいくつか示す。 iPadでの筆路の実際を観察し追体験する。 点画の連続性を意識する。	古典の筆路が理解できたか。 (A・C) 細部まで気配りができたか。(B・C)
まとめ 10分	学習を振り返り、チェックリストで自己評価をする。		

6 本時の評価

評価項目	評価の視点 (判断基準)		努力を要する生徒への支援
	十分満足できる	おおむね満足できる	
創造的な表現の技能	点画のつながりを意識して、筆脈を通して書いている。	次の画へ連続させるように運筆している。	始筆の形に注目し、なぜその形になるのか観察する。
鑑賞の能力	古典と自分の作品を比較して、古典の筆意を細部まで観察する。	うまくできた部分とできなかった部分を、古典と比較して分析している。	終筆部分がどこへ向かっているかを観察する。

7 備考

(1) Blog 竹村天祐書道記念館新本館 <http://tenyukinen.blogspot.com/>

(2) YouTube 竹村天祐書道記念館動画館
https://www.youtube.com/channel/UCvmG421Ez3ZAhZMQda3GKog?view_as=subscriber

(3) BGM 神秘のオルゴール ENL' AIR 1/f のゆらぎ 最新 J-POP HIT 作品集 1
https://www.youtube.com/watch?v=c_zgGg3iwRo

(4) 湯澤聡先生 和洋女子大学、読売書法会理事・審査員、正筆会常任総務理事

中堅教諭等資質向上研修を終えて

国語科 斎藤 竜二

採用から早くも11年目を迎え、中堅教諭として1年間研修を行った。私にとっては、本校に異動して1年目というタイミングでもあり、新たなことにチャレンジできた実りある研修となった。

【特定課題研究：「学び合い」による授業改善】

私が最も力を入れて取り組んだのが、この特定課題研究である。以前にも何度か実践し、確かな手応えを感じてはいたものの、継続的な実践はできていなかった。研修にあたり、「大曲高校スタンダード」にも合致するテーマだと考え、年間を通して実践することとした。

成果は、大きく二つ挙げられる。一つは、生徒がこれまで私が行ってきた授業に比べ、格段に生き生きと授業を受けるようになったことである。生徒を対象に実施したアンケートでは、「教師主導の授業よりも意欲的に取り組めるか」という問いに対して、約88%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した。二つ目の成果は、授業の目標と評価を明確にして授業をつくることができるようになったことである。自分の思考が明確になったことは、授業中の指示やワークシートにも反映され、生徒にとってはこれまでより、今日何ができるようになればよく、そのために何をすべきなのかがつかみやすい授業になったのではないだろうか。やはり、「今日の授業は上手くいった」と感じられるときは、この目標と評価が明確で、かつ整合性が取れているときであったように思う。

一方で、明らかになった課題は、学び合う相手の固定化である。学び合いではあえてグループを作らずに教室内を自由に立ち歩きながら課題に取り組むことを求めるが、これにより仲の良い固定的なメンバーとの学び合いに終始してしまうことが多いのだ。しかし、難解な課題になるほど固定化されたメンバーだけでは解決できないことが増えてしまう。学習内容に対する評価に加え、学習態度に対する評価を毎時間の終わりに入れるとともに、ことあるごとに「学び合い」の意義を生徒に語り、こうした状況を改善していきたい。

以上のように、年間を通して実施したことで、本当にさまざまな発見や成長があった。「今後も『学び合い』を続けて欲しい」という生徒の声に応えられるよう、研鑽を積んでいきたい。

【選択研修：株式会社アキタアルペンスポーツ 大曲ドーム】

選択研修では、部活動で日頃よりお世話になっているアキタアルペンスポーツで、日常業務の補助など3日間の研修を行った。研修を通じて、社員の方々が持つ情報量に驚かされた。日頃から雑談を含めたコミュニケーションを重視するとともに、営業に回る前には顧客の大会結果等、情報収集を心がけているという。コロナ禍の現在においても、業績は例年よりむしろ好調とのことで、こうした地道できめ細かい営業努力の積み重ねが顧客の信頼を勝ち取り、よい結果を生み出しているのではないかと考えさせられた。こうした民間サービス業者の仕事は、勤務時間があつてないようなものであり、職務範囲も顧客のニーズによってどんどん広大なものとなる。しかし、業種は違えど、顧客を生徒と置き換えると共通する部分が多い。目の前の顧客に誠心誠意を尽くす姿勢を見て、生徒に向き合う自分の姿勢を改めて考え直させられる大変良い機会となった。

【全体を通して】

総合教育センターでの研修では、さまざまなことを学んだが、共通して言えることは、中堅教諭として、授業や学級経営など、目の前の仕事をこなすだけでなく、学校全体の運営についても考えていかなければならないということだ。その自覚を持ち、広い視野で仕事に取り組む力をつけていきたい。

校内研修では校長先生や教頭先生をはじめ、多くの先生方にご指導をいただいた。経験豊富な先生方の実践に基づくリアルなお話を聞いたことは、何にも代えがたい財産となった。

冒頭にも述べたとおり、新たなチャレンジを通して、非常に収穫の多い研修であった。本研修をきっかけとして、来年度以降も教員として成長し続けていきたい。

本研修にあたり、ご指導・ご協力いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和2年度 商業科の取組

商業科 佐々木 優子

今年度の商業科の1年間の取り組みについて紹介します。

- 全商1級検定3種目以上合格者数19名（5年連続秋田県1位）
6種目取得1名、5種目取得3名、4種目取得10名、3種目取得5名（今年度卒業生29名中）

●講習会

- ・商品デザイン講習会（8月）3年生29名参加
講師：デザイン会社「モノクロ株式会社」
グラフィックデザイナー 丹野夏海氏
- ・センター簿記講習会と日商簿記2級講習会はコロナ感染予防ため中止



●大会出場

コロナ感染予防のためすべて中止

●イベントの参加

- ・夏のしゅしゅまるまつり（7月）3年生 6名参加
- ・秋のしゅしゅまるまつり（10月）3年生 9名参加
- ・秋の稔りフェア（10月）3年生 6名参加
- ・リーダーズキャンプ（12月）2年生11名参加



●商業科としての取り組み

○商業科集会

3年生の司会進行により5月と12月の年2回商業科集会を実施した。1、2年生からの質問について3年生からアドバイスをした。1、2年生にとって今後の学校生活や進路実現に向けての意識付けができた。

○3年生課題研究

大曲青年会議所や地域企業連携し、大仙市や商業科のPR活動を7班に分かれて活動した。

- ・商品開発オリジナルタオル製作（主連携先：みさとマーク株式会社）
- ・商品開発ライスコロッケ（主連携先：有限会社ミサトフーズ）
- ・商品開発生ふりかけ（主連携先：JA秋田おぼこ）
- ・商品開発パウンドケーキ（主連携先：亀太郎）
- ・商品開発オリジナルパスケース
- ・体験入学で中学生に向けて商業科紹介
- ・大曲高校ホームページへ商業科紹介ページ特設
- ・岩手県立盛岡商業高等学校販売実習「盛商マート」へ開発商品提供
- ・活動の様子は秋田民報や秋田さきがけ新聞、大曲青年会議所広報誌にて掲載
- ・課題研究の活動の成果や反省点を1、2年生と大曲青年会議所会員4名へ発表
- ・2月に商業科独自のPRイベント「商笑祭」を企画したがコロナ感染予防ため中止



大曲高校の現状の分析

教諭 川俣 玲

現在、学校を取り囲む社会情勢の変化はめまぐるしく、またコロナ禍など予期せぬ事態も突発的に発生する。学校はこのような状況に対して、これまでのあり方や方法にこだわらずに、柔軟に対応していく姿勢が今まで以上に求められるようになると考えられる。柔軟に対応していくためには、自らの学校の状況や実態を知り、それを踏まえて諸問題に対応するための体制を整えておく必要がある。

本年度は、秋田大学大学院で小学校・中学校・特別支援の先生方とともに学ぶ機会を得ているが、学校現場を離れて、一歩引いた立場から学校現場を見てみると、今まで気付かなかったことが見えてくる。そのような視点を活かしながら、9月4日に校内研修会として実施した「SWOT分析」と「学校経営診断カード」の実施結果を通して、大曲高校の現状を考察してみたい。

(1) SWOT分析について

SWOT分析とは、組織マネジメントのマーケティング手法で目標を達成するために意思決定を必要としている組織において、外部環境や内部環境を、強み(Strengths)、弱み(Weaknesses)、機会(Opportunities)、脅威(Threats)の4つのカテゴリで要因分析し、事業環境変化に対応した経営資源の最適活用を図る経営戦略策定方法の一つである。今回は実践研究の一環として、大曲高校の現状に対する職員の認識を知るために研修部と協力し、職員研修という形でSWOT分析を行った。

当日は参加職員を5グループに分けてSWOT分析を実施した。はじめにそれぞれのグループごとに個人分析を行い、その後にグループ分析を行った。各グループの分析結果として、以下のような結果が発表された。



各グループから出された主な内容をまとめると、以下の様な指摘や意見が見られた。

【強み Strength】

- 学校の特徴～地域の拠点校、進学校、複数の学科（普通科、商業科）を持つ、
- 生徒の特徴～素直、積極的、真面目、明るい、落ち着いている ※同意見が多数見られた
- 教職員に対して～ベテランが多い、指導が上手、経験値が高い
- 部活動について～伝統的に強い部活が多い、部活加入率が高い、部活動の種類が多い
- 学年部のカラーが出る、学年部を中心として生徒指導や進路指導を進めて成果をあげてきた

【機会 Opportunity】

- 立地条件～市内の中心地、アクセスの良さ、交通の便が良く広域から生徒が来る、街中にあり便利

- ・地域とのつながり～商業科があるので、地域とのつながりが強い、OBがたくさんいる
- ・町の特徴～花火を中心とした観光、花火の存在で大曲の知名度が高い
- ・新校舎～数年後に校舎改築を控えている

【弱み Weakness】

- ・学校について～生徒数の減少
- ・教育環境について～校舎の老朽化、ICT関係の弱さ、設備が物足りない
- ・進路の状況について～進学実績の低下
- ・生徒に関して～内気、受動的、目標意識のない生徒が見られる
- ・教職員に関する事～教員数は減っているが、業務の量は変わらない
- ・学校組織について
～分掌業務が例年の踏襲（スクラップ&ビルド[®]が足りない）、学年ごとにやっていることがだいぶ違う、ノウハウが継承されにくい、分掌の仕事が担当者だけで抱え込まれている感じ

【脅威 Threat】

- ・学校の特徴について～特色がない、県外の進学校との格差
- ・少子化による生徒の減少
- ・市内中学生の他地域への流出について
- ・コロナ禍での閉塞感

◎SWOT分析から見えてくるもの

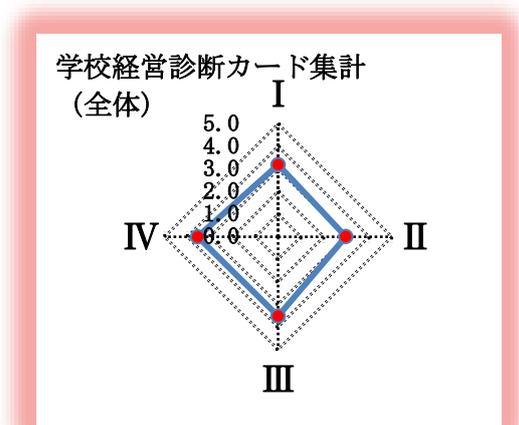
今回のSWOT分析では、全体的に生徒、教職員、教育環境に関する指摘が多数見られた。また、【機会】から現在準備が進められている校舎改築に対する期待が大きいことがうかがわれた。しかし、生徒の資質がすぐに大きく変化したり、すぐに教員数が大幅に増員されることは、現実的には期待できない。また校舎改築もまだ先のことである。これらの指摘事項を学校が日々抱える問題・課題やコロナ禍のように突発的に発生する問題を解決に導く要素とは考えることはできない。社会情勢や教育・学校を取り巻く環境がめまぐるしく変化していく状況下においては、望むような状況に変化することを待っているだけでは、（これから発生する問題に対する対処が）手遅れになる可能性があり、すぐに取り組むことを見定め、実行していかなければならない。今回のSWOT分析の中で注目すべき指摘は、【弱み】で見られた学校組織に関する点である。組織改善を図ることは、今すぐに取り組むことができることである。この組織改善の観点から、学校を今まで以上に良い方向に導くための方策を模索していくことが重要であると考えられる。

(2)「学校経営診断カード」について

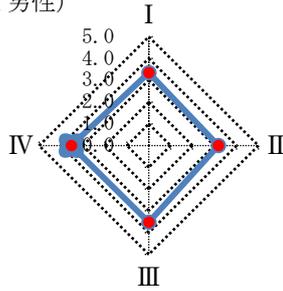
教職員集団の状態を探るために、SWOT分析の他に「学校経営診断カード」による調査を実施した。質問は大項目（Ⅰ～Ⅳ）ごとに10問ずつ、合計40問で、評価は5段階である。評価は、1=その通り、3=どちらともいえない、5=まったく違う、2は1と3の中間、4は3と5の中間、を基準としており、合計点が大きい=質問に対して違うと感じている、合計点が小さい=質問に対してその通りと感じている、と評価される。このアンケート調査をまとめたところ、以下のような結果が得られた。

図表 アンケート集計結果（全体）とグラフ

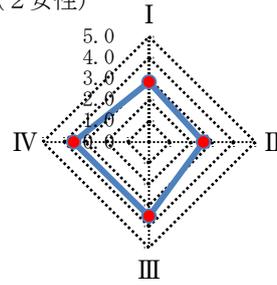
	Ⅰ 教育目標・ 経営方針と その具現化 について	Ⅱ 教育課程・ 教育活動と 運営組織・ 校務分掌に ついて	Ⅲ 仲間関係や 役割分担に ついて	Ⅳ 学校全体の 雰囲気や気 風について	平均値
全体	3.2	3.0	3.5	3.5	3.3
1 男性	3.3	3.2	3.5	3.5	3.4
2 女性	2.9	2.6	3.5	3.6	3.1
経験年数20年未満	2.8	2.5	3.2	3.3	2.9
経験年数30年未満	3.7	3.5	4.1	4.1	3.9
経験年数30年以上	3.2	3.2	3.4	3.3	3.3



学校経営診断カード
集計（1男性）

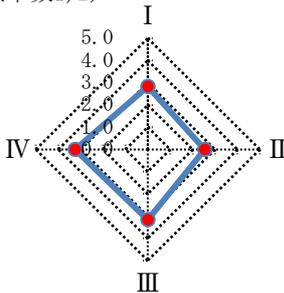


学校経営診断カード
集計（2女性）

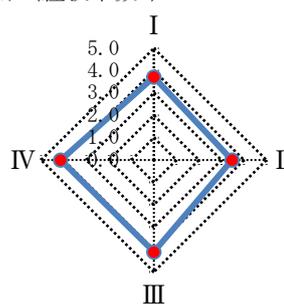


※勤続年数
1 = 経験 10 年未満
2 = 経験 20 年未満
3 = 経験 30 年未満
4 = 経験 30 年以上

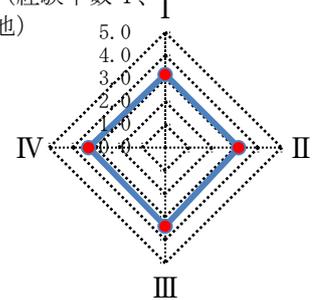
学校経営診断カード集計
(経験年数1, 2)



学校経営診断カード
集計（経験年数3）



学校経営診断カード
集計（経験年数4、
その他）



◎学校経営診断カードから見えてくるもの

数値（評価）が低い項目	質問番号	質問内容	質問項目平均値	全体平均との差
I 教育目標・経営方針とその具現化について	2	この学校では、情性でやっていることが多く、どうもまずいと思っている。	2.9	-0.4
	3	この学校では、仕事の能率が悪く、これではいけないと思っている。	2.8	-0.5
	10	この学校では、全校の目標や計画の達成に対する関心がうすいと思っている。	3.0	-0.3
II 教育課程・教育活動と運営組織・校務分掌について	11	自分の仕事の結果がうまくいったのかどうか、個々には考えているが、組織の上では、どうもはっきりしないと感じている。	2.8	-0.5
	17	仕事についての指示や報告のルートが、はっきりしていないと感じている。	2.8	-0.5
	18	分掌によっては、仕事の（質、量）面から考えて、人員が少なすぎると思っている。	1.9	-1.4
	19	仕事をすすめるうえで、もっと多くの人の意見を求めてもらいたいと思っている。	2.7	-0.6
	20	責任の範囲があいまいで、どこまでやったらいいのかわからず、とまどいを感じている。	3.0	-0.3
III 仲間関係や役割分担について	21	学校の企画に参画する人、意思決定の方法などについて、これでいいのだろうか疑問に思っている。	3.0	-0.3
	32	この学校では、意見やアイデアを出しても、これをとりあげて生かすことが少なすぎる。	3.0	-0.3

< 図表 数値が低かった上位 10 項目 >

数値（評価）が高い項目	質問番号	質問内容	質問項目平均値	全体平均との差
I 教育目標・経営方針とその具現化について	6	自分のやっていることが、学年や分掌などの関連で、どのように役立っているかわからない。	3.7	0.4
	12	仕事の上で必要な情報を求めるとき、どのようにしたらいいか、誰から聞いたらいいかわからず、とまどいを感じている。	3.5	0.2
III 仲間関係や役割分担について	25	自分の仕事やポストについて不満に思っている。	3.7	0.4
	28	この学校で仲間と働いていることがなんとなく面白くなく、気が乗らない。	3.8	0.5
	29	この学校の人たちには、仕事を遂行するのに必要な能力が不足していると思う。	4.2	0.9
	30	仕事を委ねられはしないか、無理な要求をされやすいかと不安である。	3.8	0.5
IV 学校全体の雰囲気や気風について	35	規則づくめで、かたくなしく、もっと自由に働けたらと思っている。	3.9	0.6
	37	この学校では、仲間の間に相互不信があり、なんとなくいやだなあと感じている。	4.0	0.7
	38	グループ間や他部門との対立があるため、仕事やりにくいことが多い。	3.7	0.4
	39	この学校には、責任を転嫁する風潮がある。	4.0	0.7

< 図表 数値が高かった上位 10 項目 >

1) 数値（評価）が低い項目について

数値が低かった上位 10 項目をまとめたところ、左の図のような結果が得られた。アンケートの中で数値（評価）が低かったのは、大項目 I（教育目標・経営方針とその具現化について）と大項目 II（教育課程・教育活動と運営組織・校務分掌について）であった。特に目立つのは質問 19 「分掌によっては、仕事の（質、量）面から考えて、人員が少なすぎると思っている」の 1.9 という数値である。その他に、この大項目中 I と大項目 II の質問項目から読み取れるキーワードは、「情性でやっていることが多く…」 「仕事の能率が悪く…」 「仕事をすすめるうえで、もっと多くの人の意見を求めてもらいたい」 「自分の仕事の結果がうまくいったのかどうか…組織の上ではどうもはっきりしない」 「仕事についての指示や報告のルートが、はっきりしない」 などである。これらの結果から、本校では組織のあり方や運営の仕方について問題意識をもつ教員が多くいることが読み取れる。

2) 数値（評価）が高い項目について

数値が高かった上位 10 項目をまとめたところ、左の図のような結果が得られた。数値（評価）が高かったのは、大項目 III（仲間関係や役割分担について）と大項目 IV（学校全体の雰囲気や気風について）であった。この大項目 III と大項目 IV では、「仕事を遂行する能力が不足している」

「責任を転嫁する風潮がある」「仲間との間に相互不信があり…」「規則づくめで堅苦しく…」「グループ間や他部門との対立があるため…」などの質問項目を否定する傾向が強く見られた。これらの結果から本校では、職場の仲間の能力や業務に向かう姿勢を高く評価し合い、お互いを認め合っている様子が見えてくる。

(3) 考察

今回、大学院における実践研究の一環として、校長先生・教頭先生ならびに研修部の協力のもと、本校においてSWOT分析と学校経営診断カードを実施する機会を得ることができた。この分析を通じて、SWOT分析からは、今すぐに着手できることは組織改善であること、学校経営診断カードからは組織のあり方や運営の仕方についての問題意識が教員の中に見られたことから、組織改善に目を向けていくことの必要性が見えてきた。このように教員が抱える様々な問題意識が見えてきたが、いま行うべきことは、前述したように、組織のあり方を今一度見直してみるのではないだろうか。本校が、生徒や保護者、地域から期待される学校であり続けるためには、学校としてありたい姿（ビジョン）を明確にし、学年間や分掌間、学年と分掌間、教職員間で共有し、その姿の実現を学校の目標としていかなければならない。

学校の目標の実現のためには日々変化する社会情勢に対応しながら学校の改善・改革を図っていく必要がある。組織として協働して学校の目標に向かったり、問題の解決に向かうためには、組織内（学校内）での情報交換と情報共有が必須であり、その意味において分掌会議や学年部会といった会議は極めて重要である。また、他分掌や他学年部の動きについて情報交換と情報共有を通じて知っておかなければ、組織全体としての動きになることができず、業務にもムダが生じる可能性がある。学校では人事異動が行われ、メンバーは入れ替わっていく。またこれからは教員の世代交代も急速に進んでいく。メンバーが入れ替わっても組織として課題に向かっていけるような組織体制を整えることが必要ではないかと考える。

これからは、何も問題や課題がないように見えるときに課題を見だし、組織として解決に向かう、という姿勢が求められる。独立行政法人教職員支援機構（NITS）オンライン研修の浅野良一氏（兵庫教育大学教授）の講義の中に「改善・改革とは、問題解決の連続である」「“(学校に) 問題がない、見えない”は（学校として）ありたいレベルが低い、ありたい姿が不明確」という印象深い言葉があった。何か問題が実際に起こってから対処する（＝クライシス・マネジメント）のでは手遅れで、問題の発生を未然に防ぐ、もしくは被害を最小限度に食い止めるようとする（＝リスク・マネジメント）考え方が求められていくということである。学校現場では、多忙化解消、ICT機器の導入による授業改善、大学入学共通テストへの対応、地域との連携など、行わなければならないことが山積している。諸課題に担当者のみで対処するのは無理がある。学校組織全体で諸課題に対する共通認識を持てるような体制づくりを行っていくことが喫緊の課題ではないだろうか。

授業互見月間について

研修部

1. はじめに

本校は昨年度まで、学力向上フォーラムや先進校視察、小・中・高連携事業など校外研修が多く行われていたが、今年度はそれらが一区切りついたこともあり、じっくりと教科指導などに専念する時期になった。加えて、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で校内研修の精選を図ることになった結果、今年度は従来「授業互見週間」として年2回行われていたものを年1回とし、「授業互見月間」として1か月間設定して行うこととした。そして、期間内に1回は必ず授業を公開し、見学するという形で実施することとなった。

2. 授業互見月間の概要

(1) 実施日時

10月5日(月)～11月6日(金) ※当初は10月中だったが、1週間延長した。

(2) 公開授業総数

61回…国語13回、地歴・公民8回、数学6回、理科3回、保健体育3回、芸術13回、英語7回、家庭1回、商業3回

(3) 授業互見月間の流れ

- 1) 授業公開をする教員が、「公開授業一覧表」に「授業公開カード」を貼り付ける。
- 2) 授業見学を希望する教員が一覧表を確認し、見学に行く。
- 3) 見学を終えた教員は、「授業参観カード」に感想等を記入して、授業公開をした教員に渡す。

右：公開授業一覧表（10月26日～30日）

下：「授業公開カード」

このカードに教科・科目、授業のねらいなどを記入し、一覧表に貼付する。

授業公開カード	
教科・科目	授業者
授業クラス	場所
単元名	
授業のねらい【目標や取り組みについて】	
参観者記入欄	

	月	火	水	木	金
	10月26日	10月27日	10月28日	10月29日	10月30日
1校時					
2校時					
3校時					
4校時		総合			
5校時					
6校時			LHR		
7校時					

3. 授業互見月間を終えて

授業互見月間を終えた後、次の内容でアンケートを実施した結果、15名の教員から以下のような回答が得られた。

	1	2	3	4
質問1 今回の授業互見月間によって、ご自身の授業への取り組みを見直す機会になりましたか。	9名	5名	0名	1名
質問2 テーマ『AT（アクティブタイム）の活用』に基づいた授業ができましたか。	4名	9名	2名	0名
質問3 授業参観し、ご自身の授業に参考となる部分がありましたか。	9名	3名	0名	0名
1：そう思う 2：どちらかといえばそう思う 3：どちらかといえばそう思わない 4：そう思わない				

また、次のような意見が寄せられた。

- 他教科の授業を気軽に参観できたのが良かった。
- 普段の教室での生徒の姿を見ることができて楽しい。
- 忙しい時期だったので、なかなか授業を見に行けなかったが、いつもより期間が長かったのでなんとかやりくりできました。他の先生の授業をみると、様々な気づきがあり、また自分の授業を振り返る機会にもなりよかったです。
- 「月間」となり、1週間で実施よりも授業について見直す期間をしっかりと設けることができてよかった。

時期をいつにするのがいいのか、また期間の長さについての意見もあった。年1回・1か月間にすることで長く取り組むことができた点をメリットとして挙げる意見がある一方、従来のように2週間に設定して年2回にしたほうがよいという意見、3週間にしたほうがよいという意見もあった。また、10月実施ということで、3年生の授業が教科によって大学入試問題演習にシフトしていることもあるため、次年度以降も時期・期間ともに検討を重ねていく必要がある。

4. 最後に

10月からの1か月は、多くの教員がお互いに授業を見学している様子が各教室などでみられた。この期間に多くの先生方が多忙な中、授業公開や見学などに御協力をいただき、本当に感謝の言葉でいっぱいである。今後に向けて言うならば、授業互見月間を踏まえてわかった「気づき」を自らの授業にフィードバックできるかどうか、重要な鍵を握っていくものと考えている。そのような意味では、今回の取り組みをさらに改善していく余地が十分にあると考えている。この取り組みを、ただお互いに見学して終わりというような形骸化したものにならないよう、全ての教員が互いに研鑽を重ねて、レベルアップできるようなものでなくてはならない。令和4年度から新たな学習指導要領のもとで教育課程が生まれ、「主体的・対話的で深い学び」に対する取組がこれまで以上に問われることとなる。本校ではそのような学びに対応すべく、日々試行錯誤を重ね、工夫を凝らし、視聴覚教材の活用やディベートの実施、プロジェクターやタブレット端末を利用して、生徒の中に入って対話を重ねながら授業展開をされている教員が多い。その中から参考になる取り組み、他教科でも導入することができる手法が数多くあるので、それらを自分だけ、あるいは自分の教科内だけにとどまらず、学校全体で共有し、よりよい教材研究に繋げていくことができるようにしていきたい。そのためにも、この授業互見月間が一層活発に行われるよう、検討を重ねていきたい。

